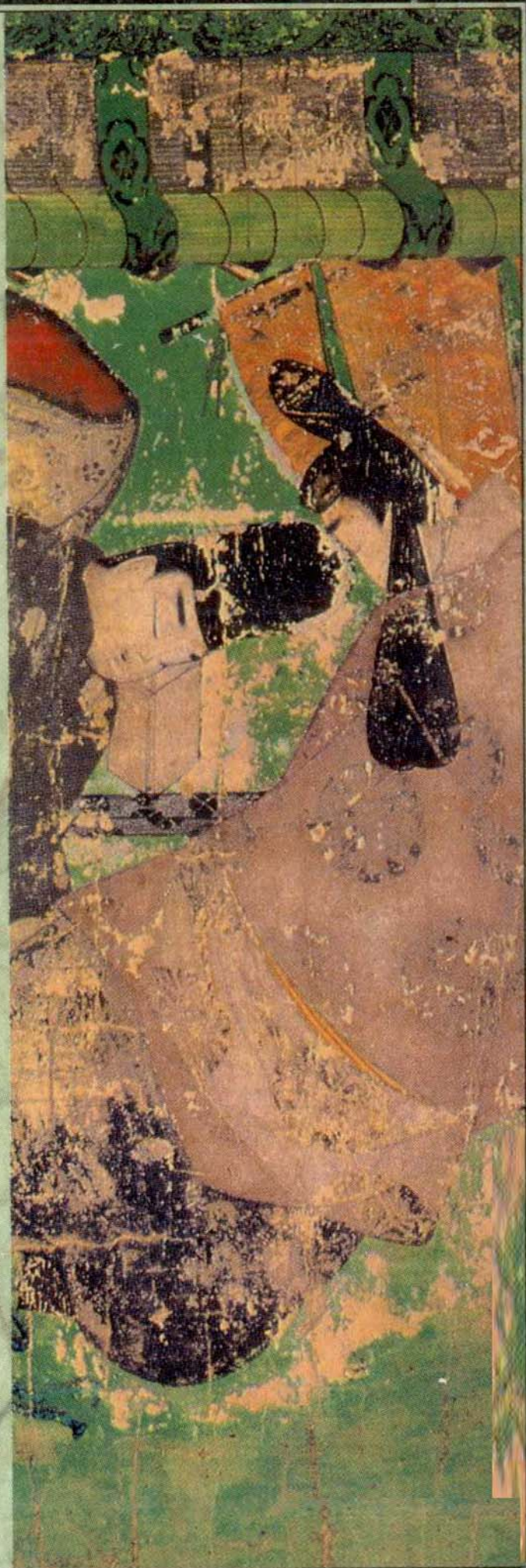


源氏物語

(五)

山岸徳平校注

黄一五—五 岩波文庫



げんじものがたり
源氏物語 (五) 〔全 6 冊〕

定価はカバーに表示してあります

1966 年 4 月 16 日 第 1 刷発行 ©

1994 年 10 月 5 日 第 29 刷発行

校注者 やまぎしとくへい
山岸徳平

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・理想社 カバー・精興社 製本・桂川製本

ISBN4-00-300155-9

Printed in Japan

岩 波 文 庫

30-015-5

源 氏 物 語

(五)

山 岸 徳 平 校 注



凡 例

一 本書は、三条西実隆筆になる青表紙証本（宮内庁書陵部蔵）を底本とした。いわゆる三条西家証本の親本である。

一 本文の校訂にあたっては、読解の便を考慮して、次のような方針を採った。

1 すべて、正字を用い、歴史的仮名づかいに改め、あて字を正し、送り仮名を補った。

2 適宜、仮名に漢字をあて、漢字を仮名に改め、振り仮名を施し、「ゝ」などの反復記号を改めたところがある。

3 句読点、濁点を施し、「」「『』」を付し、適宜改行にした。

4 底本の明らかな誤脱は、青表紙本系の他本によって改め、補ったが、校注者の見解に従って改め、補ったものもある。

凡 例
一 文脈を明らかにし、読解に便ならしめるために、主語、他動詞の目的語、自動詞の補足語、その他を、傍注として加えた。これは、日本古典文学大系の「源氏物語」において試みたことである。

3
一 注は、最も重要なものとどめ、本文に＊を付し、巻末にまとめて掲載した。(一)(二)(三)(四)は、

それぞれ、本書の第一冊、第二冊、第三冊、第四冊を示す。

一 各巻の扉裏には、系図と、主要人物の年齢を掲げた。

一 解説は、第六冊の巻末に掲載する。

目次

凡例

竹河

一、鬚黒と死別後の玉鬘の生活……………	二頁・行
二、夕霧の玉鬘邸訪問、薫と蔵人少将の煩悶……………	二五・八
三、左近中将等の懷旧と、(鬚黒の)大君の院参決定……………	三三・八
四、大君の院参、今上・薫・蔵人少将の未練……………	三三・五
五、大君に御子誕生、弘徽殿女御と疎隔……………	四二・三
六、大君懸想の人々の昇進と、玉鬘の後悔……………	四四・一三

橋姫

一、八宮の寡居生活と、姫君達の養育……………	五〇・一
二、八宮の生立ちと、薫の八宮崇敬……………	六三・六
三、晩秋、薫、宇治に姫君達の合奏を聞く……………	七〇・一一
四、薫、柏木の悲恋を弁御許に聞く、(八宮の)大君との贈答……………	七六・一二

五、薰、匂宮に宇治の山荘の模様を語る	八四・1
六、八宮の父性愛、弁御許、柏木の秘密を薰に語る	八六・4
椎 本	

一、匂宮の初瀬詣と、夕霧の別荘の中宿り	九六・1
二、八宮の山寺参籠と、姫君達への訓誡	一〇四・12
三、八宮の他界と、悲嘆の姫君達	一二四・1
四、薰、大君を思慕、匂宮、薰を恨む	一二七・10
五、匂宮、夕霧の六君との婚姻拒絶、薰の宇治訪問	一三五・2

総 角

一、八宮一周忌の準備、薰の大君思慕	一四一・1
二、大君、中君を薰にと考慮、薰、中君と仮寝	一五四・9
三、薰、匂宮を宇治に案内し、姫君達に連絡	一七三・4
四、匂宮の後朝の文と三日夜の餅、中君の悲嘆	一七九・8
五、匂宮、山荘訪問不如意、姫君達の失望	一九〇・10
六、大君の重態、薰の看病下に他界	二二三・4

早 蕨

一、阿閼梨の早蕨贈呈	二三五・1
------------	-------

二、薰と匂宮との和歌の贈答	三七・4
三、薰、中君の上洛前日に、山莊訪問	四一・6
四、中君、二条院に移る	四六・10
五、夕霧、薰を六君の婿にと思う、薰の中君訪問	五〇・4

宿 木

一、藤壺女御他界、女二宮の婿に薰を注目	五七・1
二、夕霧の匂宮懇望と、明石中宮の匂宮教訓、中君の煩悶	六一・12
三、薰の失意と中君の後悔、寂しい心同士の接近	六六・12
四、匂宮と六君の婚姻、中君の憂悶	七二・12
五、三日夜の宴と、薰の供人の愚痴、薰と按察君	七六・10
六、匂宮の薄情と、失意の中君に、薰の恋情つゐる	八二・13
七、薰の移り香に、匂宮、中君を詰問	八三・1
八、薰、中君の女房に衣料贈与、薰の恋に中君懊惱	八六・4
九、薰、弁尼に寝殿政策を語り、浮舟の事を聞く	八九・3
十、宿木の歌唱和、薰、紅葉を中君に贈る	九三・13
十一、中君の若君誕生と産養	九三・3
十二、女二宮の裳着と、薰との婚姻、三日夜の宴	九五・11

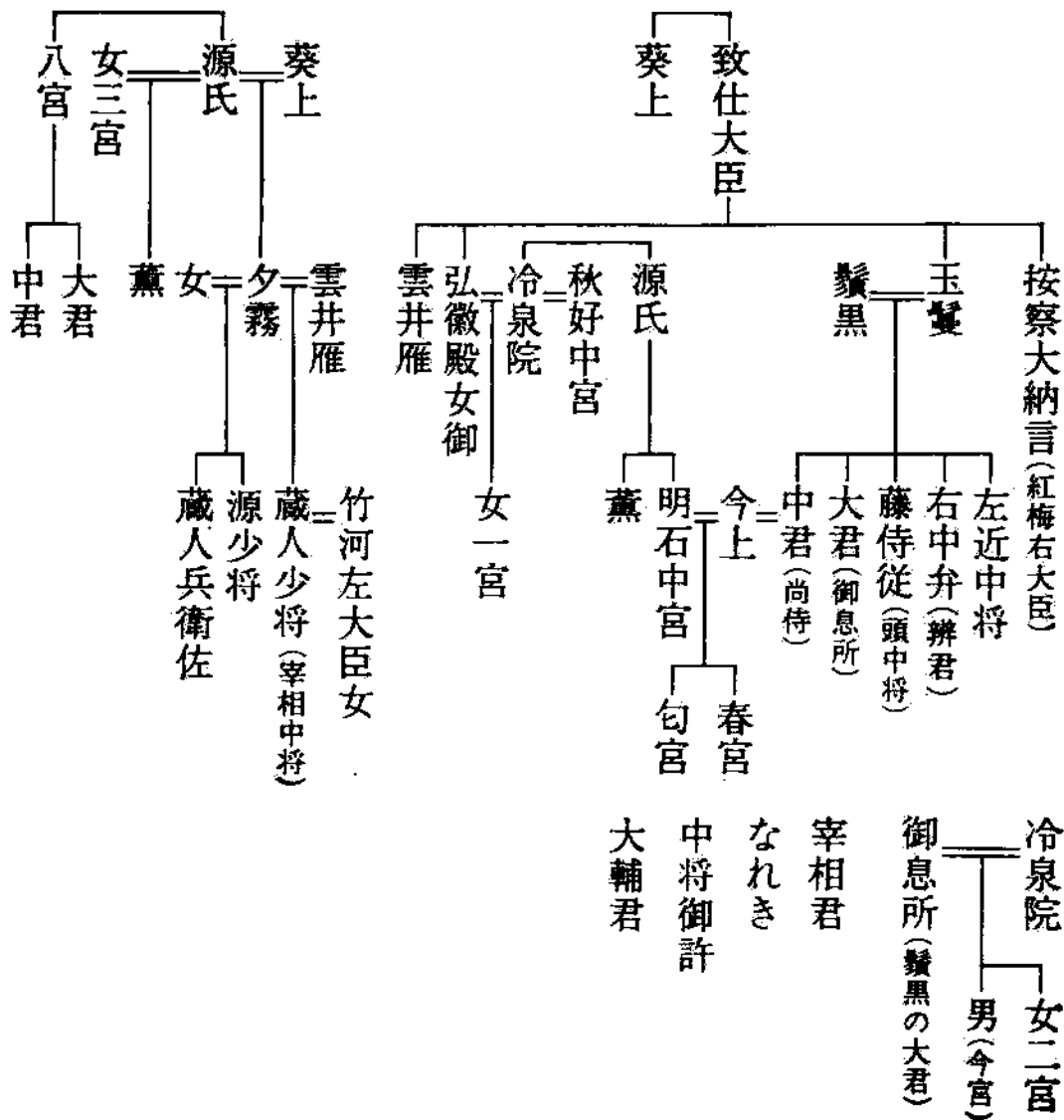
十三、藤花の宴、薫への天盃と、按察大納言の羨望	三四〇・7
十四、薫、宇治を訪れて、浮舟を覗き見る	三四五・2

注	三五三
---	-----

竹^{たけ}

河^{かは}

句宮：十五歲—二十四歲
夕霧：四十歲—四十九歲
秋好中宮：五十二歲—六十一歲
明石中宮：三十三歲—四十二歲
玉鬘：四十七歲—五十六歲
大君：十六歲—二十五歲
中君：十四歲—二十三歲



これは、源氏の御族にも離れ給へりし、後のおほとわたりにありける悪御達の、落ちとまり
 残れるが、問はず語りしおきたるは。紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源
 氏の御末／＼に、ひが事どものまじりて、きこゆるは」〔世に〕「我よりも、年のかず積り、ほけたりける
 人の、ひがごとくや」など、怪しがりける、いづれかは、まことならむ。

〔玉鬘〕内侍のかみの御腹に、故との御子は、男三人、女二人なむ、おはしけるを、さま／＼に、か
 しづき立てむことを、おぼしおきてて、年月の過ぐるも、心もとながり給ひし程に、あへなく亡
 せ給ひにしかば、夢のやうにて、「いつしか」と、いそぎおぼしし、御宮仕へも、おこたりぬ。〔世の〕人
 の心、時にのみよるわざなりければ、さばかり、いきほひいかめしくおはせし、おとゞの御名残、
 うち／＼の御寶物、領じ給ふ所／＼など、その方の衰へはなけれど、大方の有様、ひきかへたる
 やうに、殿の内も、しめやかになり行く。かむの君の御近きゆかり、そこらこそは、世にひろご
 り給へど、なか／＼、やむごとなき御なからひの、もとよりも、親しからざりしに、故との、な
 さけ少しおくれ、むら／＼しき過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふことも、ありけるゆか
 りにや、たれにも、えなつかしう、きこえ通ひ給はず。六條院には、すべて、なほ、昔に變らず、

數まへ聞え給ひて、うせ給ひなむ後のことども、書きおき給へる、御處分の文どもにも、中宮の
 御次に、くはへたてまつり給へれば、右の大殿などは、なか／＼、その心ありて、さるべき折／＼、
 おとづれ聞え給ふ。をとこ君たちは、御元服などして、おの／＼、大人び給ひにしかば、殿おは
 せで後、心もとなく、あはれなることもあれど、おのづから、なり出で給ひぬべかめり。「姫君た
 ちを、いかに、もてなしたてまつらむ」と、おぼし亂る。内裏にも、かならず、宮仕への本意ふ
 かきよしを、おと／＼の、奏しおき給ひければ、「おとなび給ひぬらむ」と、年月を推し量らせ給ひ
 て、「入内をと」おほせごと、絶えずあれど、「中宮の、いよく、並びなくのみなり勝り給ふ御けはひにおさ
 れて、みな人、無徳にものし給ふめる末に、まゐりて、はるかに目をそばめられたてまつらんも、
 煩はしく、又、人に劣り、數ならぬさまにて見む、はた、心づくしなるべき」を、おもほし、た
 ゆたふ。冷泉院より、いと、ねんごろに、おぼしのたまはせて、かんの君の、昔、本意なくて過
 ぐし給うしつらさをさへ、とりかへし、うらみ聞え給ひて、
 冷泉「今は、まいて、さだ過ぎ、すさまじき有様に、思ひ捨て給ふとも、うしろやすき親に、な
 ずらへて、ゆづり給へ」

と、いとまめやかに、〔姫所望を〕きこえ給ひければ、「いかゞは、あるべきことならむ。〔私〕みづからの、いと、

口惜しき宿世にて、〔私の〕思ひの外に、『心づきなし』と、おぼされにしかば、〔私は〕はづかしう、かたじけな

きを、〔姫の院参にて〕この世の末にや、〔私の心を〕御らんじなほされまし」など、さだめかね給ふ。〔姫達は〕かたち、いとようおは

する聞えありて、心かけ申し給ふ人、多かり。〔夕霧〕右の大殿の藏人の少將とかいひしは、三條殿の御

腹にて、兄君たちよりも、引き越し、いみじうかしづき給ひ、人からも、いと、をかしかりし君、

いとねんごろに申し給ふ。〔父母の〕いづかたにつけても、もて離れ給はぬ御中らひなれば、〔夕〕この君たちの、

むつび参り給ひなどするは、〔玉も〕け遠くもてなし給はず。〔玉方の〕女房にも、〔少將は〕けちかく馴れ寄りつゝ、思ふ事

を語らふにも、便ありて、〔女房達が〕夜晝、あたり去らぬ耳かしがましさを、うるさきものの、心苦しきに、

かむの殿も、おぼしたり。〔雲井雁〕母北のかたの文も、しばく、〔玉に〕たてまつり給ひて、

夕いと、軽びたる程に待るめれど、おぼし許す方もや」

となむ、〔夕〕おとゞも、きこえ給ひける。〔大君〕ひめ君をば、更に、〔玉は〕たゞのさまにも思しおきて給はず、中

の君をなむ、「今すこし、〔少將が〕世の聞え、かるくしからぬ程に、〔中君に〕なずらひならば、さもや」と、〔玉は〕おぼ

しける。〔玉が〕ゆるし給はずば、〔大君を〕ぬすみも取りつべく、〔少將は〕むくつけきまで思へり。〔此婚姻を〕「こよなき事」とは、〔玉は〕お

ぼさねど、女方の、心許し給はぬ、事の紛れあるは、人聞きも、あはつけきわざなれば、〔少將の文を〕きこえつぐ人をも、

玉「あな、かしこ。過ちひき出づな」

など、のたまふに、〔女房達は〕くたされてなむ、煩はしがりける。

〔源〕六條院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれ給へりし君、冷泉院に、御子のやうに思しかしづ

く四位の侍従、その頃、十四五ばかりにて、いときびはに、幼かるべき程よりは、心掟て、大人

しく目やすく、人にまさりたる生先、しるく物し給ふを、〔玉〕かむの君は、婿にても見まほしく

思したる。〔玉〕この殿は、かの三條の宮に、いと、近き程なれば、〔薫も〕さるべき、折くの遊び所には、

きむだちに引かれて、〔玉邸に〕見え給ふ時くあり。〔玉邸は〕心にき女のおはする所なれば、〔若き男の〕心づか

ひせぬなう、見えしらがひ、〔玉邸に〕さまよふ中に、かたちの良さは、この、〔玉邸を〕たち去らぬ藏人の少將、な

つかしく、心恥づかしげに、なまめいたる方は、この四位の侍従の御有様に、〔薫〕似る人ぞなかりけ

る。〔源〕六條院の御けはひ、ちかうと、〔薫を〕思ひなすが、殊なるにやあらん。〔薫は〕世の中に、おのづから、

もてかしづかれ給へる人なり。〔若き人々、〕心殊にめであへり。〔玉〕かむの殿も、「げにこそ、〔薫は〕めやすけ

れ」など、のたまひて、^{〔燕に〕}なつかしう、物聞え給ひなどす。

玉^{〔源〕}院の御心ばへを、思ひ出で聞えて、^{〔心の〕}なぐさむ世なう、^{〔悲しさの〕}いみじうのみ思ほゆるを、^{〔源〕}その御形見にも、^{〔御身ならで〕}たれをかは見たてまつらん。右の大臣は、ことごとしき程にて、ついでなき^{〔たいめん〕}對面も、難きを

など、^{〔燕に〕}のたまひて、^{〔玉と〕}兄弟のつらに、^{〔燕を〕}おもひ聞え給へれば、かのきみも、^{〔燕〕}さるべき所に思ひて、^{〔玉邸を〕}参り給ふ。^{〔燕には〕}よの常のすきごとしきも見えず、いといたうしづまりたるをぞ、こゝかしこの若き人ども、^{〔口惜しう〕}さうごとしきことに思ひて、^{〔燕を〕}いひ惱ましける。

睦月の朔日ごろ、^{〔玉〕}かむの君の御はらからの大納言、^{〔高砂うたひしよ〕}高砂うたひしよ、藤中納言、^{〔鬚黒〕}故大殿の太郎、眞木柱の一つ腹など、^{〔玉邸に〕}まゐり給へり。右の大臣も、御子ども六人ながら、^{〔夕〕}引きつれておはしたり。^{〔夕は〕}御かたちよりはじめて、飽かぬ事なく見ゆる、人の御有様・おぼえなり。^{〔夕の〕}君だちも、さまごと、いと清げにて、年の程よりは、^{〔つかさくらゐ〕}官・位すぎつゝ、「何事を思ふらん」と、^{〔み〕}見えたるべし。世とともに、^{〔親に〕}藏人の君、かしづかれたるさま、^{〔こと〕}殊なれど、うちしめりて、思ふことあり顔なり。^{〔夕〕}おとどは、御几帳へだてて、昔に^{〔かは〕}變らず、^{〔玉に〕}御物語きこえ給ふ。